

「コロナを超えて ～いのち輝く社会へ」

大学院大学至善館

教授 枝廣 淳子

皆さん、こんにちは。アフターコロナで、人も戻ってきて、インバウンドもたくさんの方が来てくださり、良かったというところで、このようにコロナ後の社会をもう一度考えるということは本当に大事な機会だと思っています。そのような機会に今回お呼びいただいたことをとてもうれしく思います。

「コロナ」とは何だったのか？

最初に、コロナとは何だったのかということをお話しさせていただきます。私はいま、社会人向け大学院の至善館で教えるほか、地方創生や企業のお手伝いをしていますが、もう一つの活動として「幸せ経済社会研究所」というバーチャルな研究所をつくり、2011年の1月から活動しています。私自身環境問題に取り組むようになって25年ほど経ちます。その中で、本当に環境問題を解決しようと思ったら、環境のことだけやっていては駄目だ。幸せとは何なのか、経済の仕組みはどうあるべきか、社会のつながりはどうあったらいいか、そういうことを考えることなしに環境問題だけが解決できることはないと思って、幸せ経済社会研究所というのをつくりました。

調査概要

一般調査（一般）

2020年5月29日から5月30日にかけて、全国の524人を対象にインターネット調査法を用いて実施。（調査委託先：マクロミル）
対象年齢は20歳以上、年代、性別および大都市／中小都市・地方の割合は日本人口比に合わせた

自分のネットワークを通じての調査（高関心層）

2020年5月24日から6月9日にかけて、枝廣の環境メールニュースやFacebookなどで呼びかけて実施
環境問題や持続可能性、SDGsなどに関心の高い層784人から回答を得る

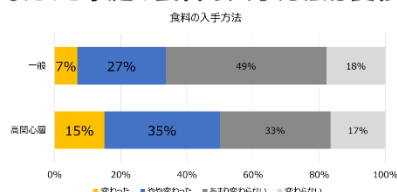
この研究所で、実はコロナの間に調査を行ったその結果をまず一緒に見ていただきたいと思います。二つの調査をほぼ同時に行いました。一つは一般調査といって、ネット調査の会社に頼んで、一般的に性別とか年代とか、大都市・地方の人口比に合わせたかたちで調査を行ったものです。もう一つは、私自身、環境メールニュースというのを20年前から出していますが、そういったメールニュースで、環境のことを考えたいとか、そういったことが大事だという、いわゆる高関心層の方々、こちらにも呼びかけて調査を行いました。

共通の質問項目

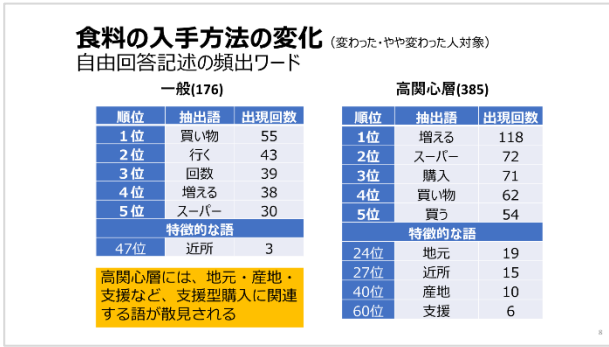
- 1 食べ物の入手方法は変わったかどうか
【自由回答】具体的な変化について
- 2 自由に使える時間は増えたかどうか
【自由回答】その時間を何に使っているか
- 3 新しく始めたことや、以前よりも時間を多く使うようになったことはあるか
【自由回答】1. 具体的な内容について
2. コロナ収束後も続けて行こうと思っていること
- 4 人との関係性が変わったかどうか
【自由回答】具体的な変化について
- 5 幸福度は上がったかどうか
【自由回答】その理由について

聞いたのは、ちょうどコロナが始まって数カ月のところでした。食べ物をどうやって入手しているか。自分の時間。コロナということきっかけに始めたこと。人との関係性。それから幸福度についても聞いてみました。この辺りの変化がどうだったのか、違いがどうだったかを一緒に見ていきたいと思います。

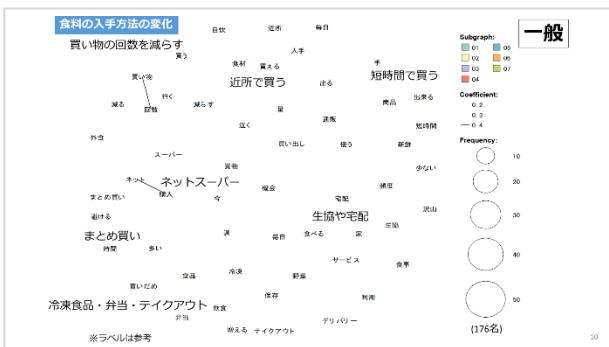
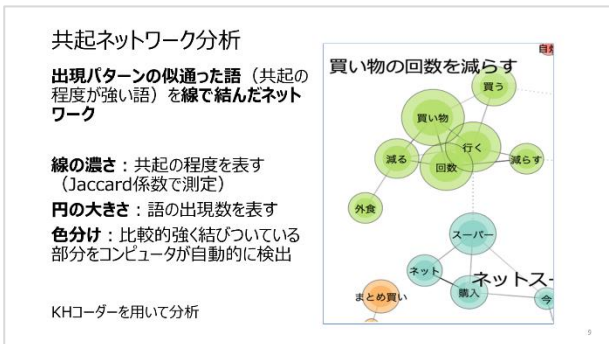
新型コロナウイルス感染の状況下で、 あなたのご家庭の食料の入手方法は変わりましたか



一般では35%程度が変わったと回答しているのに対し、高関心層は50%程度が変わったと回答している

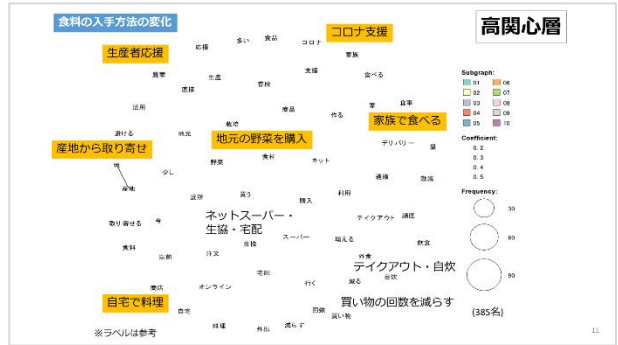


まず、食べ物の入手方法が変わりましたかという質問です。上が一般の方の結果です。下が高関心層、こういった環境問題とかサステナビリティに関心がある方です。高関心層のほうが高い割合で、食べ物の入手方法が変わりましたという返事が来ました。どのようなかたちで変わったかを自由記述で書いてもらっているのですが、高関心層のほうがだと、特徴的な言葉として、地元、近所、産地、支援など、コロナで行き場を失った食べ物をみんなでなんとか引き受けましょうという支援型の購入が、この時期あちこちで始まっていたのですが、やはり一般の方に比べると、高関心層の方はそういったところに感度高く反応されていたなと思います。

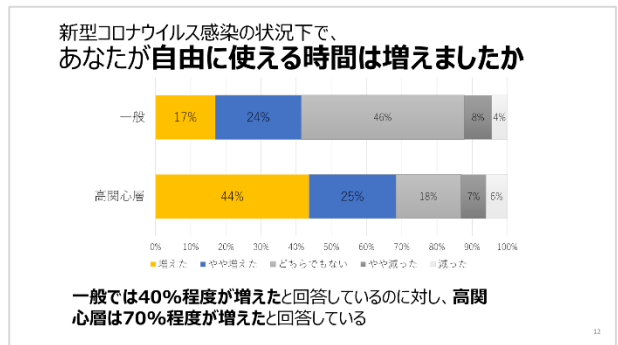


このとき、私たちの研究所で、共起ネットワーク分析というものを行っているのですが、出現パターンの似通った言葉を結んで、どんな関心のグループがあるかを見るというやり方です。こちらの食料の入手方法ですが、一般の方では、近所で買う、

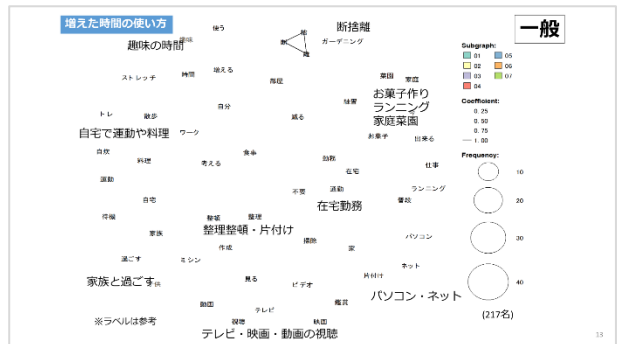
短時間で買う、ネットスーパー、まとめ買い、テイクアウト、こういったことがグルーピングで出てきました。



一方、高関心層の方は、先ほどお話ししたように、生活者の応援とか、コロナ支援とか、産地から取り寄せ、地元の野菜を購入、あと面白いと思ったのは、家族で食べる、自宅で料理するなどといった言葉が出てきました。ですので、同じコロナの状況に置かれても、もともとどういったことに関心があるかによって、反応がだいぶ違うのだなということを思いました。

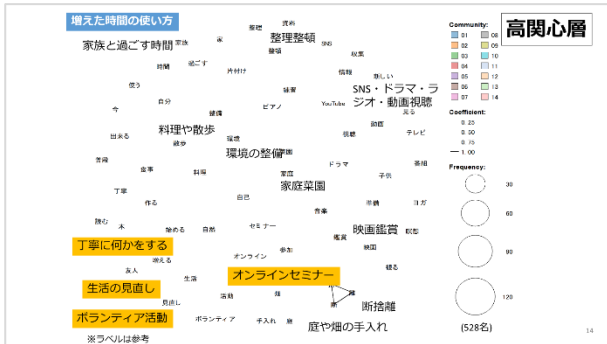


もう一つの質問が、自由に使える時間はコロナで増えましたかということです。これも、一般の方は40%程度が増えたという回答でしたが、高関心層の方は7割の方が、コロナで通勤がなくなったり、出張ができなくなったりといったことかと思いますが、自分の自由になる時間が増えましたということです。

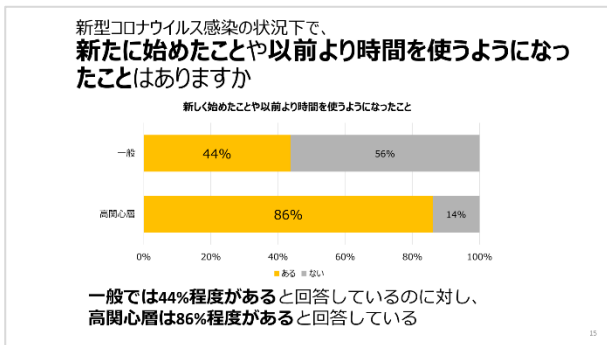


では、増えた時間をどう使ったか。これも自由記述で書いてもらいました。これは一般の方の答えです。趣味の時間とかお

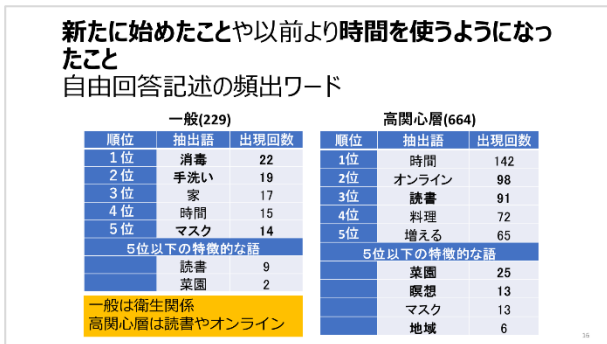
菓子作り、ランニング、家庭菜園、あとは断捨離や整理整頓、そういった機会にコロナ禍の時間を使った方が結構いらっしやったようです。また、自宅で運動とか料理とか、テレビ・映画とか。



それに対して、高関心層の方々の特徴的な反応が、オンラインセミナーや生活の見直し、あと、丁寧に生きる、丁寧に暮らすという意識を持つようになった方も多かったです。あとは自分のできるボランティアに時間を使うようになった等です。

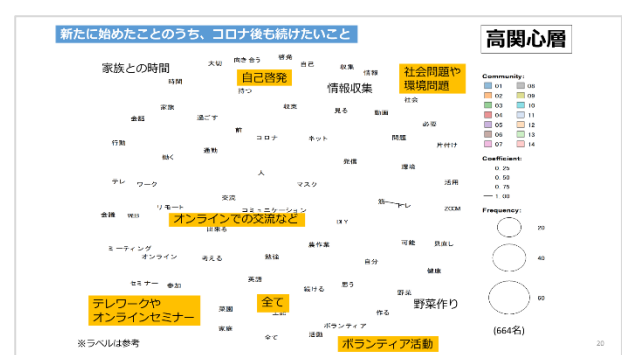
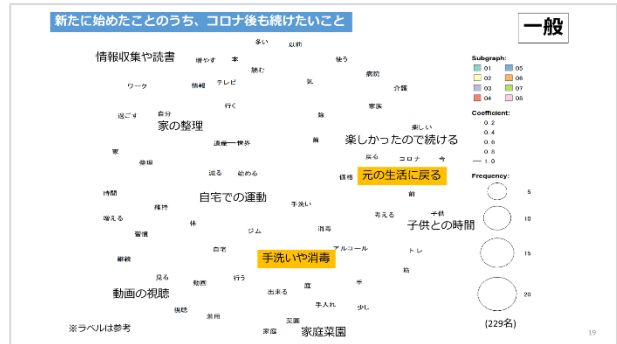


そして、次の質問が、コロナということで新たに始めたこと、以前よりも時間を使うようになったことがありますか、という問いです。これも、特に関心の高い方々、もともと環境問題、サステナビリティに関心のある方では、9割近くの方が、新たに始めたことや、そういったことがありますということでした。

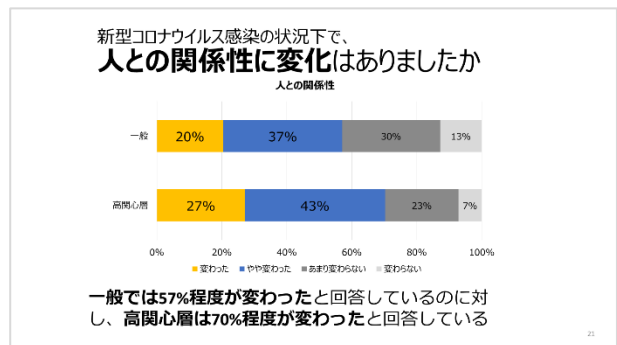


どんなことが出ていたか。一般の方は消毒とか手洗いとかマスクとか、あとは読書といったことが多くて、衛生に時間を使っ

たという答えが多かったです。それに対して、関心の高い方々は、勉強されている方が多かったのかなど。オンラインや読書、あと面白いと思ったのは瞑想、地域の活動に時間を使うようになった、このような違いも出てきていました。

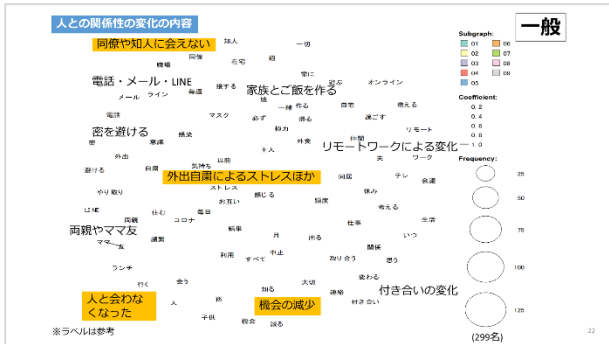


これは共起分析です。いまとはほぼ同じことが出ているので飛ばしますが、新たに始めたことのうち、コロナが終わった後も続けたいことはありますか、という質問に対する答えをみてみます。一般の方々は、手洗い、消毒、あとは元の生活に早く戻りたいという答えも多かったのですが、関心の高い方々は、コロナが終わった後も自己啓発や社会問題、環境問題、オンラインでの交流、それからボランティア活動などは続けたいといった回答でした。

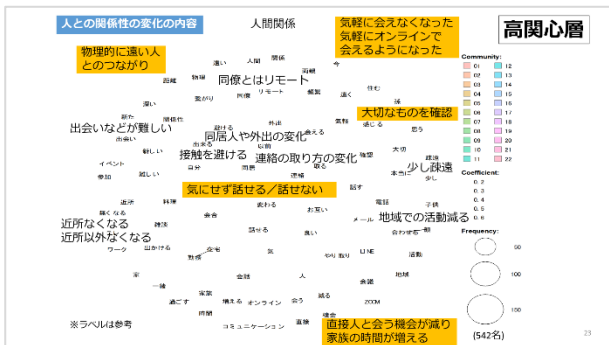


そして、人との関係性に変化があったかという質問では、これも両方とも、一般的にも、高関心層の方も、やはり関係性に変化があった、これは後ほどお話ししたいと思います、とて

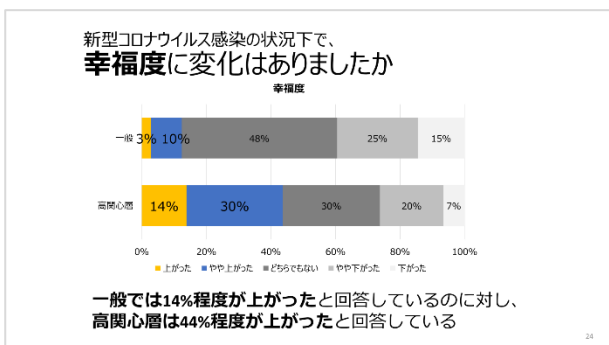
も大事な部分だったかなと思います。ソーシャル・ディスタンスということが言われて、普段だったら顔を合わせて会議をして話ができただけですが、それができなくなったということが人ととの関係性に当然影響を与えるわけです。



それがどんな影響だったかという自由記述の方を見ると、やはり人に会えないとか、外出できないことでストレスが増えたとか、出会う話したりといういろいろな機会が減ったという、割とネガティブな答えが一般のアンケートからは出てきました。



一方、関心の高い人たちは、逆に、物理的に遠い人とのつながりができました、オンラインによって、例えばほかの国とか、普通だとなかなか会えない方々とやり取りすることができるようになった、そういった回答がありました。あとは、直接人と会う機会が減って、逆に家族との時間が増えた、これは多くの方が感じたことかもしれません。



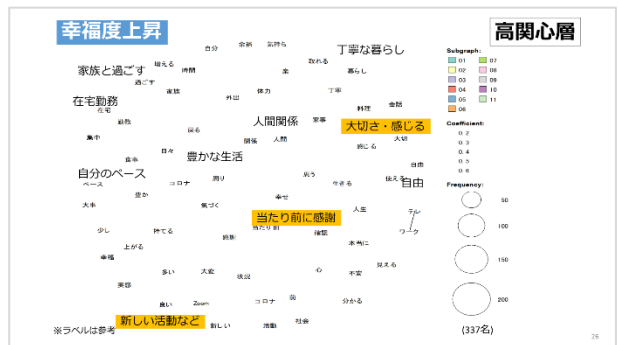
最後の質問で、このコロナの状況で、あなたの幸福度に変

化があったかという質問をしています。これを見ると、一般の方々も 13~14%は幸福度が上がったと答えています、上がっていない、やや下がった、下がったという方も結構多いです。

それに対して、関心の高い方々は、半分近くの方から、実は、コロナで幸福度が上がりましたという答えが来ていました。



幸福度が上がった理由を聞いた自由記述を見ると、一般の方々は、金銭的に困っていないので、不便がなくて、もしかしたら、大変な方々と比べると自分は幸福だという認識をされたのかもしれない。割とそういった答えが多かったようです。



それに比べて関心の高い方々は、当たり前前に感謝するようになったとか、コロナをきっかけに新しい活動を始めたとか、大事なことを思い出したり取り戻したり、それから感じるという時間を大事にできるようになったりといった答えが出てきていました。



私たち幸せ経済社会研究所では、こういった二つの調査を同時期に行い、ここから見えるものは何だろうかと考えました。

「状況の変化」の捉え方

(1) 脅威と捉える
「奪われる」「減らされる」「ストレス」

(2) 見直しや学びの機会と捉える
「大切なもの」「試す」「気づく」

- 誰にも両面あるが、その割合が違う
- 変化をどう「握り直す」か？
- 心理的レジリエンスも違いをつくる要因の1つ

28

一つは、状況の変化、コロナが大きなきっかけだったのですが、その捉え方も、みんな同じわけではない。人によってやはり捉え方が違うなということです。一般の方に書いていただいたアンケートにより強く出ていたのは、このコロナの状況は脅威であるということです。何かを奪われるとか、減らされるとか、ストレスにつながるとか、そういったニュアンスの回答がとて多かったです。

それに対して高関心層の方では、逆にこれは新たなチャンスという捉え直しをしていた方が多かったです。これがあつたから大切なものに気が付いたとか、これがあつたから新しいことを学ぶきっかけになった、そういったことがいろいろ出てきたかなと思います。

もちろん、どなたにも両面があると思います。コロナがあつて、怖い、大変だ、不便だということと、しかし、その状況を前向きに捉える、そういったことが両方あつたと思います。つまり、コロナという、外に出られない状況を、どのように捉え直すか、握り直すか、これが人によってかなり異なり、それによって、その機会をどう使うか、もしくは幸福度がどう変わるかも違ってくるのだと思いました。

やはり、元々いろいろなことを試してみるとか、多少会えなくても我慢できるような心理的なレジリエンスが強い方と、何かあつた時にすぐ自分の脅威に感じてしまう、レジリエンスの少なめの方との違いでもあるかなと思います。

幸せ経済社会研究所の情報発信

新型コロナウイルスに負けないために
国内外の素敵な取り組みを知ろう！

～その先の持続可能で幸せな社会にむけて～

29

私たち幸せ経済研究所では、コロナの間にはできるだけポジティブなニュースを出したいと思って、コーナーを作っていました。コロナの関係だとどうしてもネガティブな、悲しい、辛い情報発信が多くなってしまい、それはそうなのですが、しかし一方でそれに負けないという国内外の素敵な取り組みがたくさん広がった時期でもあると思うのです。それをできるだけ集めて、全部で240本ぐらいの記事をこの期間に出していました。



かなりたくさん記事が集まった後、その記事をカテゴリ分けして発信するようにしましたが、一つは、先ほど医療関係者への冷たい視線や差別という話もありましたが、一方で、地域の医療崩壊を防ごうという取り組みもあちこちでありました。こういった発信をしました。



それから、学校がお休みになってしまい、働いているお母さんが大変になってしまうとか、子どもたちの行き場がなくなるとか、特に貧困家庭のお子さんたちは、学校給食が自分の食べ物の大事な部分を占める場合もあるのに、学校がなくなってしまうと給食もなくなってしまう。そういった休校に対して、教育の機会とか、子どもたちを支援しよう、こんな動きも日本の各地で実は広がっていました。



また、どうしても影響を受けやすい方々、社会的な弱者を優先して支援しよう、応援しよう、そんな取り組みもあちこちで広がっていたと思います。



あとは、やはり農家さんもそうですし、観光業もそうですし、コロナで人が動かない、動けないということで、いろいろなところで経済的にも大変になってしまった事業者さんを応援しよう、そんな動きも各地でありました。先ほども出ていましたが、コロナ支援とか、地元で買い物をするとか、作ったはいいいけれども行き場がなくなった農作物とか、おかずとかをみんなで食べようという動きも、あちこちであったと思います。



それから、コロナをきっかけに、やはり外になかなか出られないので、逆に地元を発見したという声もよくあります。コロナをきっかけに、自宅の周りしか出歩けないので、逆に近所の人と仲良くなった、地元こんな場所があったのかという発見があったという声をよく聞きましたが、そういったところから、新しく

地元再発見。地元の住民同士で助け合おう、そんな動きもあちこちであったかなと思います。



そして、新しいつながり方ですね。これまでとは違うような、インターネットもありますし、いろいろな Zoom 会議等を含めて、新しいつながり方というところも動きとしてあったと思います。



あとは、新しい働き方ですね。通勤しない働き方、もしくは働く場所とか働くスタイルもかなり多様化したと思いますし、社会の在り方としても、コロナをきっかけに新しい試行錯誤が、先ほどの炭谷先生のお話の、環境も福祉も、というような取り組みの兆しのようなものが、特に世界でもいろいろと出てきていたかなと思います。

大きな流れとして見えるもの

私自身、この 240 本の記事をずっと編集して発信していく中で、大きな流れとして見えてきたと思ったことが幾つかあります。

① 経済至上主義から、「命」を大前提とする経済社会へ

一つは、また後段でもお話をしますが、経済至上主義から「命」を大前提とする経済社会へという動きが出てきています。やはりこれまで、売上や GDP の成長、経済が大きくなって、初めて福祉とか農業とか大事なこともお金が回せるはずだという、トリクルダウンという考え方がありますが、その経済至上主義だけではやはり違うだろうと。大事なことを、やはり最初に大事にした方がいいという捉え直しが広がってきたと思います。特にコロナは多くの方々の命を奪いましたので、命をまず大前提にして、それを守るということ、それを支えるということ、それがいかに大事かという話が出てきたと思います。

② 都市と地方の関係性の逆転

距離がハンディにならない時代へ

もう一つは、特にリモートでの仕事が広がったということもあって、都市と地方の関係がだいぶ変わったかなと思います。距離がハンディにならない時代になって、それはワーケーション

ンなど、その後もいろいろつながる動きにもなっていますが、都市に人が集まって、地方はどんどんさびれるというのから、いま、若い人たちは逆に都市を出て、地方に移住するという流れにもなってきています。

③ ローカル・シフト

- ・ 「地元」の発見・再発見
- ・ 食べ物の入手方法（自家菜園、おすそ分け、地元農家支援、コロナ支援型購入など）
- ・ 人やお店とのつながり

ローカルシフトと私は呼んでいますが、地元の再発見とか、食べ物の入手方法も、スーパーで買えば安く買えるかもしれない、でも地球の裏側から届いているものを買っているかもしれない。そうではなく、やはり地元で作っているものを優先しよう、そんな動きもあったと思います。

こういった流れは、コロナが収束する中で、一部、また元のとおりに戻って、経済至上主義に戻っているなというところもありますが、全て戻ったわけではなく、大事な種というのか兆しというのか、そこでできた実感や手応えを、人々はきっとこれからも大事に育てていくのではないかなと思っています。

ニュー・ローカル

地元を足をつけて、「リアル」の手応えを得ながら生きる

これまでの距離的・地理的・時間的制約を超えて
学び、つながり、ローカルのリアルを伝え、先へ進む
その知見や成果を、ローカルに還元しながら
ローカルより大きな世界を自由に行き来し、両方をはくむ

こういった中で、ニュー・ローカル、これは私が勝手に作った言葉なのですが、地元で自分の居場所をしっかりとって、リアルの手応えを得ながら生きる。そうすると、いままでは地方に移住するということが必要となっていたのですが、そういった距離的な、もしくは時間的な制約を超えて、もっと自由に地域につながるができるようになっていく。地域に入って、そこに閉ざされるのではなく、地域に入ったからこそ、全国と、もしくは世界とつながることができる。そんな生き方を選ぶ人が増えてきたと思っています。



実は私自身も、このニュー・ローカルの一人ではないかと思っていますのですが、コロナをきっかけに熱海に完全移住をしました。その前から仕事部屋を持っていて、海が大好きなので、海を見ながら翻訳したり本を書いたりしたいと思って、週末だけ行っていたのですが、コロナをきっかけに、どうせこもるのだったら海の見える部屋にこもりたいと思い、完全移住しました。



その中で、地元の方々とつながって、未来創造部という会社を作り、いま熱海でいろいろな活動をしています。



例えば、海洋プラスチックです。熱海は海がありますので、実際にビーチで海洋プラスチック、マイクロプラスチックの実験をやったり、その後、皆さん、最近では企業研修がととも増えているのですが、企業の皆さんがビーチクリーンを一緒にやってくださったり。

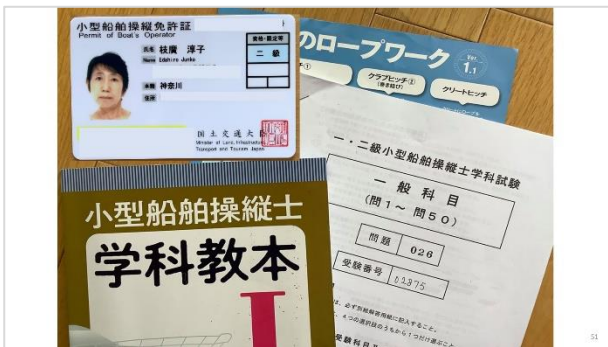


あとはもう一つ、ブルーカーボンという取り組みをやっています。先ほど温暖化の話がちらりと出ましたが、温暖化を止めるために皆さんの企業でもやっていたらいいや、ゼロカーボンとかカーボンニュートラルが大事であることは大前提ですが、これと同時に、いったん大気に出てしまった CO2 を回収しないと、温暖化は止まりません。植林はもちろん大事ですが、海の中の植物にも吸収してもらおう、これがブルーカーボンの考え方です。



熱海の家も、磯焼けといって、もう藻場、海藻がなくなってしまっています。それを何とかしたいということで、伊豆半島の反

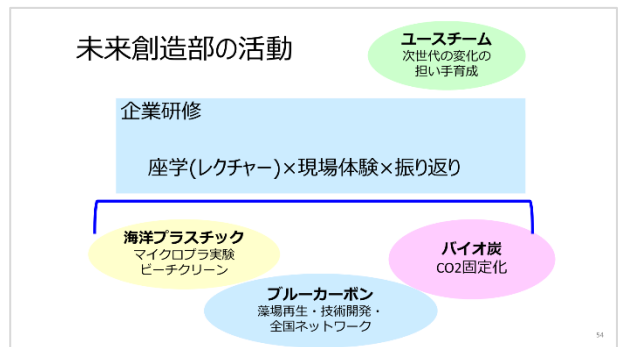
対側の土肥というところはまだ海藻があるのですが、これが実は刈り取られてしまうというので、刈り取られる前にもらってこようというプロジェクトをやっています。これは一緒に会社をやっている仲間ですが、ダイバーさんでもあるので、潜ってこやって海藻を掘り上げ、それを次の日、熱海の海で植えているところです。一株一株、こやって手で植えるのも大変な話ですが、本人は海の中の田植えだと言って笑っていました。こんな活動を熱海でしています。



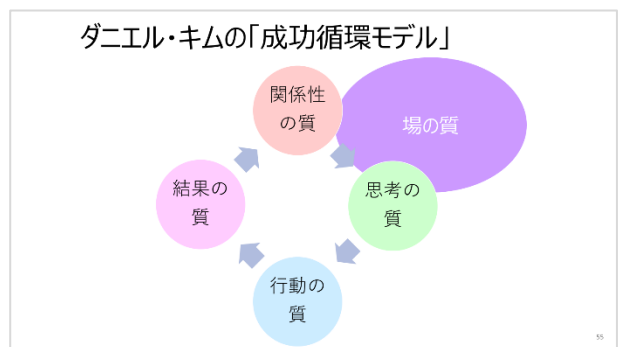
これが同僚の船なのですが、この船でこういった活動をしたり、企業研修で来られた方々に一緒に活動に参加してもらったりということで、実は私も熱海に行ってから小型船舶操縦免許を取って、いま、船を操縦して熱海の海で活動をしています。



それと同時に、大気に出た CO2 を植物に回収してもらうだけではなく、それを固定化しないと、また腐ったり燃やされたりすると、大気中に戻ってしまいます。これを固定化する鍵は、炭を作ること、炭化、バイオ炭です。いま、熱海の山の、町から10分ぐらいのところの土地を借りて、この製炭炉を置いて炭にするという活動もしています。これを日本全国に何千基と広げていきたいという妄想を描いています。

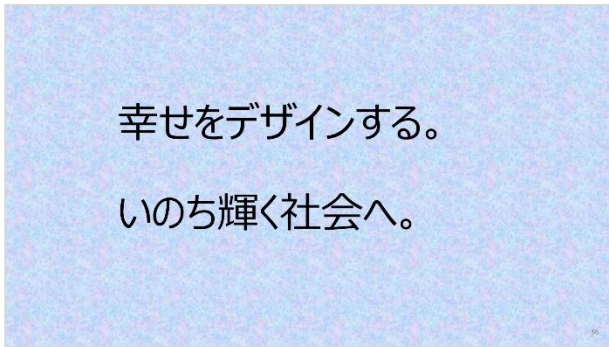


このような現場の活動と、それらを経験してもらって、企業がいろいろ考えるお手伝いをする。座学を私がさせていただき、現場体験をしてもらい、振り返りをおこない自社にとっての意味合いを考えていただくという企業研修をやっています。

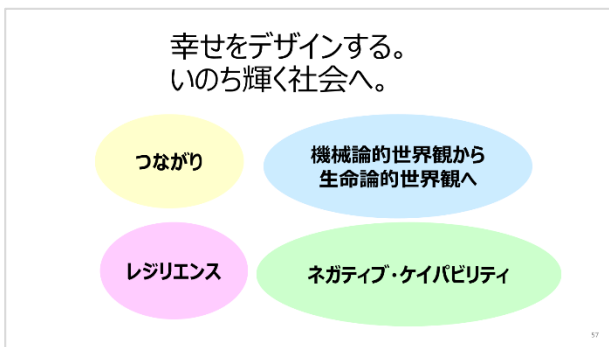


結果の質を出すためには行動の質、そのためには思考の質、そのためには関係性の質を変えていく必要があるというダニエル・キムの考え方ですが、この関係性の質を変える上で、場の質を変える、場の質を高めるというのは大事だと思っています。

ですので、東京の会議室で研修をするのではなく、わざわざ熱海まで来てもらって、熱海の潮風に吹かれ、そして海の波の音を聞きながら、ビーチの砂の感触を自分で感じて、そしていろいろなことを体験したり考えたりというリアルな活動をする、ニュー・ローカルの一人になったのかなと思います。



こういった自分の経験も踏まえて、今回のお題である「幸せをデザインする。いのち輝く社会へ」といったときに、大事なことが四つあると思っています。



ここに書いてある四つです。

一つは、繰り返し、阿部先生、炭谷先生からも出てきたこととつながりますが、まさに「つながり」ということです。

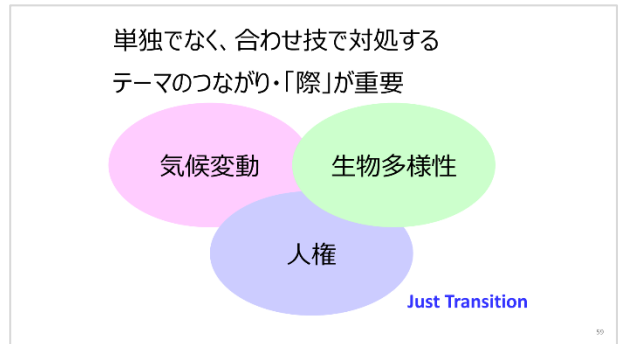
地球環境問題：どんどん複合化

- ・ オゾン層の破壊
- ・ 気候変動
- ・ 生物多様性の危機
- ・ プラスチック汚染
- ・ 森林破壊
- ・ 水問題（質、量）
- ・ 農業
- ・ 海洋 などなど

「人権」という次元とも関連しあう

こちらは、環境問題というのはどんどん複合化しています。そして福祉とか人権とも密接に絡み合っています。これは先ほど炭谷先生がおっしゃったとおりだと思います。これまで企業のいろいろな環境活動をご支援してきましたが、温暖化を考

るグループと、生物多様性をやる担当者が違ったりするわけですね。でも地球を考えたら、もう同じなわけです。



ですから、いかに単独ではなく合わせ技で考えていくか。やはりつながりを意識していかないといけないのです。

気候変動だけを考えるのであれば、たくさん CO2 を吸収する、例えばユーカリのような木をたくさん植えるのがいいのです。でもそれは、温暖化にはプラスになるかもしれませんが、生物多様性的にはマイナスになります。このように、いま、ジャスト・トランジションということが非常に言われるようになっていますが、気候変動対策をするときも、人権とか、それこそ、誰一人取り残さないとか、そういったことを考えやらないといけない、そういう時代になっています。つながりというのがとても大事です。



このルービック・キューブをよく出します。目の前の1面を合わせても、後ろがぐちゃぐちゃでは大変でしょうと。目の前の問題だけ解決するのではなくて、どうつながっているか。

つながり

- ・ 人とのつながり・社会の絆
- ・ デイスタンス → 見えないつながりの意識化
- ・ 自然界との適切な距離
- 手つかずのままに置いておけるか
- 「成長主義」から脱却できるか

それとともに、やはりソーシャル・ディスタンスで人とのつながりが薄くなった、切れてしまった社会の絆を、どういったかたちでもう一回つなぎ直すのか。そういったことが大事です。

また逆に、自然界と人間とのつながり、もしくは距離感をどう取るか。82万種の未知のウイルスがこれから出てくるかもしれないという話もありました。私たちが、手付かずのまま自然界を置いておけるかという話だと思うのです。

これはまさに、炭谷先生がおっしゃっていた、経済成長をどう捉えるかということとまったく同じ問題です。経済成長をしないといけないとしたら、どこまでも、どこまでも、フロンティアを求めて、ジャングルの奥までも私たちの経済活動が入っていきまします。そうではなくて、もっと大切なことがある、ここは開発しないで置いておこうということが、私たちは言えるようになるかどうか。つまり、成長至上主義から脱却できるかどうか、これを考える必要があります。

レジリエンス

- 回復力、再起力、弾力性
- 「しなやかな強さ」
- 外部からの衝撃が不可避な時代
- その個人・組織・地域・社会が外部からの衝撃・影響に対してどれほど持ちこたえることができるか？
- 不安定・不確実な時代を生きていくために必須の力

そして、もう一つはレジリエンスです。先ほども言いましたが、回復力、何かあったときに立ち直る力です。これからも外部からの強い衝撃が、それが戦争なのか新型の感染症なのか、さまざま出てくるときに、それでポキッと折れるのではなくて、しなやかに立ち直る力、これをどのように私たちが、個人としても、組織としても、地域としても、社会としても、持っておくか。

これは、このことを伝えたくて数年前に出した『レジリエンスとは何か』という本ですが、怖いことに、このレジリエンスというのは、あるところまでは持ちこたえられたとしても、ある一線を越えると戻れなくなってしまいます。

ある一線を越えると戻れなくなってしまふ！

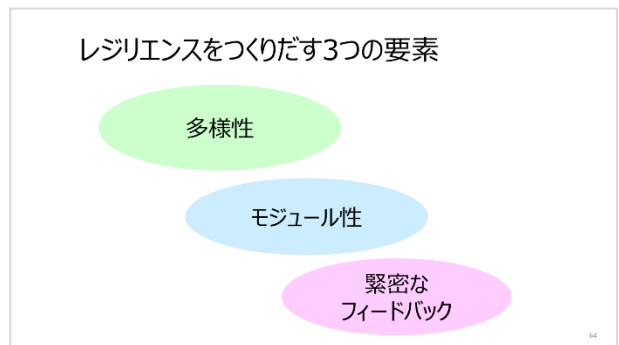
• カタストロフィック・レジームシフト

• 以下の組み合わせで生じる

- ① 外的な力の大きさ
- ② システムの内的なレジリエンス

これは同じ場所の写真です。サンゴ礁ですが、ある一線を越えると、カタストロフィック・レジームシフトというのですが、破局的に変わってしまふ、戻れなくなってしまふ。

それはどのように起こるかという、外の力がどのぐらい強いのか。そして、受けて立つ、例えばここでいうとサンゴ礁のシステム、生態系が、どのぐらいレジリエンスを持っているか。残念ながら、外的な力はどんどん強くなります。そして、残念ながら、私たちの社会、地域、個人の、先ほど子どもの状況の話もありましたが、内的なレジリエンスはどんどん弱くなってしまふ。これはとても怖い状況ではないかと思ひます。



レジリエンスをつくり出す要素として、世界のレジリエンス研究者が言っていることは、一つは多様性です。一つに賭けてしまふと、それが倒れたときに駄目になってしまうので、いろいろなものを持つておくということです。それから、モジュール性です。普段はグローバル経済とつながっていてもいいけれども、何かあったときは、例えばそこから切り離して自分たちだけで回るような仕組みになっているか。例えば地域通貨など、地域で雇用を創っていく、地域の経済をどうするかということは、ここにもつながってきます。

もう一つは、緊密なフィードバックです。何かあったときにすぐそれが分かるようになっているか。これが大事な要素だといわれています。

レジリエンスの実現のためには

レジリエンスの創出・維持にはコストが必要

- 多様性やモジュール性：平時は「ムダなコスト」
- 短期的な目標達成のためには、重要なフィードバックも“見ないふり”

短期的な経済効率(目に見える) vs

中長期的なレジリエンス(目に見えない)

短期的な効率至上主義をどう乗り越えるか?

そして、これを実現するためには、もう一つ考えないといけないことがあります。それは、レジリエンスは大事なのですが、なかったという大変なことになるのですが、これを創って維持するのはコストがかかるということです。

例えば、日本の企業も 3.11 の後、いろいろと取引先を多様化する、部品が一つに固まっていたから全部止まってしまったという経験をして、サプライチェーンを多様化するという動きになりましたが、またそれが戻っています。なぜかという、多様なところから仕入れるという、コスト競争力が効きませんので高くなってしまいます。

多様性やモジュール性というのは、あれもできる、これもできるというようにしておきましょうというのは、平時には無駄なコストになってしまうんですね。そうすると、やはり短期的な経済至上主義の中では、これはどんどんと削られてしまいます。

ですから、目に見える短期的な経済効率をあげるというプレッシャーと、長期的に大事な、何かあったときにないと困るレジリエンスを保っておくということなのですが、いまはやはり経済至上主義の方が強いので、あちこちでレジリエンスが弱くなっています。これを伝えてくれたのが、コロナの一つの効果だったと私は思っています。この短期的な経済至上主義を超えないといけないということです。

機械論的世界観から 生命論的世界観へ

近代西洋思想

- 要素還元主義
- 理性万能主義
- 二元論 (主客分離)
 - ✓ <主体>としての人間の理性
 - ✓ <客体>としての対象なる存在
- 分析専門主義
- 計数至上主義

東洋思想

- 全体として捉える
- 心身一如
- 根本に還る
- 見えないものを見る
- 直感的
- 一元論 (主客一致)

それからもう一つは、私たちのものの見方です。近代的な西洋思想は二元論で、還元主義で、どんどんものを小さくして個

別に見る、部分を見るというかたちで発展してきました。それに対して、東洋思想というのは、もともとは全体を見るという考え方があったわけですね。それをもう一回、思い出さないといけないのではないかなと思います。

自然観の違い

西洋思想

神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造した。男と女に創造された。神は彼らを祝福して言われた。
『産めよ、増えよ、地に満ち地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて治めよ』
(旧約聖書 創世記 1章 1節)

- 「スチュワードシップ」
神から委託された自然の**管財人** (steward)としての人間

東洋思想

- 「一切衆生悉有仏性」(涅槃經)
- 「草木国土悉皆成仏」
- 「万物斉同」(莊子)

- 「生かされている」
時空を超えた万物の**つながり**の中に存在する命

自然をどう見るかというのも、東洋と西洋はかなり違います。西洋は、神様から人間が自然の面倒を見るように委託されていると。だから、人間が上にいて自然界を支配するという考え方が強いわけですが、東洋思想だと、生かされているという言葉があり、これは英語にとでもしづらい言葉ですが、私たちはいろいろなものつながりの網の前の中に生かされているのだという感覚を、私たちは元来持っていたはずです。そういったものを考えていく必要があります。

つながり

レジリエンス

機械論的世界観から
生命論的世界観へ

これらのためには
すぐに結論に飛びつかず
に、いろいろ模索したり、
考えつづける力が必要

こういったことを大事にしようと思うと、最後のポイントになりますが、先ほど阿部先生が最初におっしゃったように、立ち止まるとか、振り返るとか、見直すという、その力が必要になってきます。私たちはいま「コスパ」だけではなく「タイパ」、タイム・パフォーマンス、即時決断、即時行動を求められます。特に企業の方はそういった状況に置かれている中で、結論をすぐに出さないで見直すとか、振り返るとか、こういった力のことをネガティブ・ケイパビリティと言っています。

ネガティブ・ケイパビリティ

評価されるのは「ポジティブ・ケイパビリティ」

- 情報収集する能力
- 分析する能力
- 予測する能力
- 計画を立てる能力
- 資料を作成する能力
- スピーチをする能力
- 文章を書く能力
- プレゼンテーションをする能力
- 物事を処理する能力
- 「問題解決能力」

解決すべき問題が明確にわかっている場合に有効

私たちの直面している問題は？

問題が明確な問題 vs 見えていない問題

- 問題が明確な問題
問題を解決すればよい
- 見えていない問題
問題が見えなければい
けない

正解がある問題 vs 正解がない問題

- 正解がある問題
(例：月の軌道を計算する)
正解を求めればよい
- 正解がない問題
質の高い解決策をつくる
しかない

いま一般的に評価されているのは、この逆のポジティブ・ケイパビリティ、問題解決の能力ですね。これは、問題が何であるかははっきり分かっている場合には有効なのですが、いま私たちが直面している問題は、まず、見えていない問題もたくさんあるということです。問題が見えていればそれを解決すればいいのですが、見えていない問題をどう見るかが、まず考えないといけないことです。

そしてもう一つは、正解がある問題と正解がない問題。皆さんがいま立ち向かっているのはどちらの問題でしょう。いま、多くの場合は正解がない問題だと思います。この正解のない問題に対しては、唯一の答えを求めるといよりも、質の高い解決策を作り続けるしかないのです。これもやはり時間がかかります。

問題が明確にわかっているのに、ポジティブ・ケイパビリティのみを追求すると……

- 問題の出口の改善や**対処療法**にとどまる
- 部分最適**に陥る
- 安易な選択**や集中を行う
- 表層の「**問題**」のみをとらえて、深層にある本当の問題に切り込むことをしない
- 答えのある問題しか取り上げない
- 解決法や処理法がないような状況からは**逃げ出す**が、はじめから**近づかない**

それなのに、パッと決める、すぐに決める、早く考えろ、結論は何だ、そういう世界にいると、どうしても対症療法とか、部分

最適とか、安易な選択とか、そういったかたちで、本当の問題に切り込むことができなくなってしまっています。これがいまの多くの組織や社会ではないかと思います。



つい最近、先月、「クローズアップ現代」でも、このネガティブ・ケイパビリティを、モヤモヤする力という分かりやすい言葉に変えて、番組を作ってくれました。

ここでもお話をしたのですが、こういう番組ができること自体、ネガティブ・ケイパビリティが大事で、私たちは、分かったと思った瞬間に思考停止してしまうのですが、そうではなく、まだ分からないのだと、全部は分かっているのだと、立ち止まって結論を保留する。分からなくても、そこで耐え続ける。これは実は、パッと思考停止するよりもエネルギーが必要なのですけれども、これが、いまとても大事になっていると思っています。

ネガティブ・ケイパビリティ

※「わかった」と思った瞬間に
思考停止してしまいがち

- 定義や結論をサスペンド(保留)する力
- 不確実で曖昧な状態のなかにとどまる能力
- どうにも答えの出ない、どうにも対処しようのない事態に耐える能力

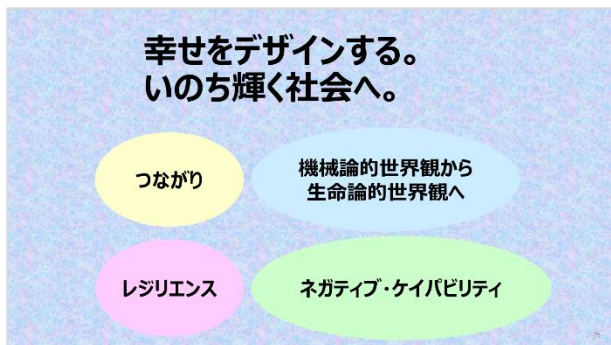
「不確実性を許容する高度な能力」
「知的寛容さ」



人間の「器」

これも伝えたいと思って、ネガティブ・ケイパビリティの本を、『答えを急がない勇気』というタイトルでこの春に出しました。こ

の本に対する反応を見ている、やはり本当にこういうことが大事だと思いますという反応をいただいています。



いまの時代、急げ、急げと、それが加速しているけれども、だからこそ、立ち止まって、振り返って、見直す。そこでつながりをもう一回取り戻すとか、レジリエンスを高めるための手立てを大事にするとか、機械論的な、どんどんと還元主義で全てを手段として、部分として見ていくのではなく、全体として捉える、そういった生命論的な世界観を大事にするとか、そのためのネガティブ・ケイパビリティを身に付けるといったことが、幸せをデザインして、「いのち輝く社会」になっていくために大事なのではないかなと思っています。

私の話はここまでです。ありがとうございました。

(終了)